



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : [daimao@travelmitra.jp](mailto:daimao@travelmitra.jp))

## 「道を歩く人がやってきた」追記「夢について」

わがお笑いエッセイ7月号をお土産代わりに差し上げたところ、ある翻訳者から次のようなメールを頂いた。

「夢の話読みました。とてもおもしろいので、これから定期購読したいです」

わが輩の愛読者が一人ふえた。もう少し「夢の話」、いや「裏話」を聞かせて、というご意見もあったので、この際夢について語ってみよう。

わが若き頃の哲学科は、哲学専攻と心理学専攻が混在していたので、一般「心理学」と「臨床心理学」を受講したことがある。一般「心理学」の中川作一助教授は、テレビ出演もあった人気心理学者で講義は面白かった。笑いを取るのが巧みで、小笑いから始まって大笑いで授業がおわった。だから授業内容は全く覚えていない。開講のとき「君たちは、早稲田慶応にかなわないから、地方に帰りなさい」と言われたことだけを覚えている。「臨床心理学」については、教授の名前さえ忘れた。抑揚のない講義口調に、わが輩の頭がついていけず、とうとう授業を放棄してしまった。

「ボクは心理学を学んでいるので、人のココロが分る」

と言った心理学専攻のクラス・メイトがいた。

人のココロが分れば、商売で大儲けができる。そもそも君の恋焦がれるマドンナは、ちっとも君に関心がないことになぜ気づかないの、と当時のわが輩は思っていた。人さまのココロなど分かりっこない。中川助教授も開講のとき、そう言った。

これで読者諸氏は、わが輩が心理学オンチであることが理解できたであろう。それゆえ、夢の解析や分析などわが輩にできるわけがない。そこでユング心理学の権威河合隼雄『ユング心理学入門』(岩波書店)の力を借りることにした。

わが輩は去る7月15日午前に比叡山で講演する機会を与えて頂いた。午後は宮本祖豊師が講演された。宮本師は、比叡山十二年籠山行を満行した方である。戦後で六人目の行者である。NHK「こころの時代」で観たことがあったが、実際にお会いすると意外と小柄にみえた。癌を患っていて、抗がん剤で体重がおちたそうである。聴講者の一人が「大魔王さまと目が似ている」と言ったが、確かに若いころのわが輩に似ている。とはいえ、メインの講師はもちろん宮本師で、わが輩は落語という前座であった。

宮本師の講演で、わが輩が注目したのは「ほとけの姿」を観るということである。

十二年間の籠山行に入る前、自己を反省して心身を清らかにしなければならない。その行を好相行という。仏の名を唱えて一日に三千回の五体投地をする。十五～二十時間ほどかかる。一週間ほどで意識が飛んでしまうようだ。立ったまま眠ってしまう。そうすると幻覚を見る。それでも人は思い、考えてしまう。従って自分に都合のよい「自我、エゴ」が残ってしまう。それを消すために、極限まで身体と精神を”痛めつける”のである。

宮本師の場合、とうとう眼前に阿弥陀如来が現れた。しかし、これとて幻覚か自我がつくり上げたイメージかもしれない。正しくは、目を開けても閉じても、眼前に「仏」がいなければならない。しかも、平面的な絵仏でなく、立体的に光り輝く「仏」でなければならない。その体験は先輩僧の判定を受け、天台宗座主から認可を受ける。

講師控室で「難行をしなくても、『仏』の姿を見ることはできますか」と質問した。「あるでしょう」との答えを得た。

さて、7月号で紹介した彼の僧の話に戻ろう。夢に龍樹菩薩があらわれて「南天鉄塔に行け！」と命じたという話である。インドを去る日が近づいてきたとき、霊山のお寺に老僧と二人で泊まっていた。そのとき夢をみた。

昔わが輩は老僧に、この夢のことを問い質したことがある。

「朝起きて来て、変なことを言うんだよね」

と老僧は言った。夢をみたことは確かなようだ。

彼の僧は老僧に「南天鉄塔」の場所を尋ねた。南インドの鉄塔に密教の経典が納められているという伝説の地である。梅尾（トガノ）祥雲（高野山大学学長）は、アーンドラ・プラデーシュ州のアマラーヴァティーの仏塔だとしていた。ところが、老僧は梅尾説を知らなかった。そこで龍樹菩薩（ナーガールジュナ）→ナーガ（龍・蛇）→ナーグプル（龍の街）→仏教徒という連想ゲームが始まった。重要なのは龍樹ではなく、「仏教徒」にあった。

この連想ゲームを何か神秘的なものとして語っているが、何のことはない、老僧もその僧団もナーグプル仏教徒と歴史的に関わりがあった。彼の僧も僧団の出版物をよく読んでいたので、知らないはずがない。ゲームは彼の僧の思いのまま、浪曲調に、増幅されていった。

宮本師は難行をして、立体的な「仏」をみた。難行なしでも「菩薩」がみえるかもしれないが、彼の僧のボサツは、〈夢〉だから目覚めると消えてしまった。

河合隼雄の本を開いてみると、「自己（セルフ）そのものを知り尽くすことはなく、自己の象徴的表現を通じて、その働きを意識化することができる」（P.260）とある。深いところにある心（潜在意識）も形になって現れることがある。ときに超人間的なものとしてあらわれる。

「男性にとっては老賢者（Wise old man）、女性においては至高の女神の姿をとって夢に現れる」彼の僧の場合は、龍樹菩薩らしき老賢者として夢にあらわれた。

わが輩は、夢は「大抵は経験した事の範囲内にある」と述べたが、彼の僧は自らそれを証明した。彼の僧が制作した龍樹菩薩像は、インドの僧形とは全く異なる、長い髭にロングドレスの、正に道教の老子風の〈石像〉であった。どこかで見て記憶にあった老子風仙人が、夢として現れてきた。河合説「自己（セルフ）の人格化された像」とほぼ合致している。

7月号で、彼の僧は学者先生に「夢じゃない！」と一喝したが、「浅き夢見し」の心像、イメージにすぎず、実ブツであるはずがない。